

《史料紹介》

山田文昭書簡

中川 剛

本資料の山田文昭（一八七七一—一九三三）の書簡は、伊藤証信（一八七六一—一九六三）が晩年過ごした西三河の西端無我苑で通称「玉出箱」と呼ばれていた手文庫に収められていた。この手文庫は、証信が生涯幾度も引越しを繰返した中で、常に手元に置かれていたものといわれる。伊勢湾台風によって無我苑は半壊したため、数多くの資料が散逸したり、水没したなかで無事であった数少ない資料である。時期としては、明治三八年から四二年までのもので、一八通である。

文昭と証信は、真宗大学からの同級生であり、研究院の時に巢鴨・真宗大学に土地を提供した巢鴨村・村長の田崎惣太郎の離れを二人で借り、共同生活をしていた。この離れは、二人の雅号古川（証信）と夢白（文昭）の一字ずつ取り「古白庵」と名付け、ここでの生活は一年半ほ

ど続いた。

明治三七年、文昭の父が急逝したため、三河に帰ることとなる。新住職としての多忙な法務によって体調を崩し、真宗大学を休学してしまう。一方、証信も父危篤の知らせを受け、郷里の伊勢へ帰った。父の容態が安定に向かったため、退院して病床の父と休んでいるときに神がかりの状態に陥った。この感動を「無我の愛」と名付け、東京に戻り文昭のいなくなった古白庵で「無我の愛」の実践として近所の子供達に読み書きを教えるようになった。このことが発展し、村長でもあった大家の田崎惣太郎に相談し、夜学会を条件に家賃のかからない荒れ果てた巢鴨の大日堂に移り、「無我苑」と名付け無我相運動を展開することとなる。ちなみに、文昭は一度も巢鴨・無我苑を訪ねることはなかった。

書簡は、明治三八年一月からのものであり、時期としては、証信が古白庵で夜学校を始めたころのものである。本資料「書簡一」は田崎惣太郎の娘・せんに宛てた書簡と「書簡二」は、証信がせんの代筆をした下書きと思われる書簡である。大日堂に移ってから「実業夜学会」として真宗大学の学生や河上肇なども手伝ったとされるが、夜学会で文昭の書簡をもとに修身が行われていたことは興味深いと思われる。

注目されるのは、従来、雑誌『無我の愛』は広告のビラの形で巣鴨付近に配布された「日曜通信」から発展したとされるが、大日堂移転以前より、週刊『平民新聞』や『直言』を雛形にした機関紙が企画されていた点である。「書簡六」に「いつ、僕等は宗教的平民新聞を出すことが出来るであろう」と信仰の宣伝として巣鴨から発行することを期待していることが伺える。

証信の主張した「無我の愛」に関しては、文昭は始から懐疑的であった。機関紙『無我の愛』が発行された時点で、その教義を理解したと考えられる。文昭の関心は、いかに布教を進めるのかという運動論に共鳴していたことが伺える。「無我の愛」は「他に愛を任せ、而も同時に全力を奮って、他を愛する」という考え方である。文昭は、「愛他」に関して「愛」という概念が主観的な意味を含んでいるところに「無我」との矛盾が生じると主張した。第一次無我愛運動は発展する過程で、教団化していった。また後年、河上肇が「愛他」について誤った解釈をしていたと『自叙伝』で述べているように、「無我の愛」を論理的に位置づ

けることができなかつたことによる証信の行き詰まりが閉苑の理由である。文昭の指摘は的を射たといえよう。

証信が無我苑を閉苑して、赤松照憧に請われて山口県徳山へ行った後から、再び書簡の往来が始まった。その内容は「無我の愛」については全く触れられていないが、文昭が上京した経緯や住田智見や多田鼎との交流に関して記されている。特に多田から綱島梁川について学び『病問録』『回光録』を熟読していることは興味深い。証信が「無我の愛」を得得する直前に読んでいたとされている。文昭は「無我の愛」を否定した後も、信仰という点で関心を持ち続けたのである。

証信の主體的な精神運動は宗教界、文学界、社会運動家、政治家など多大な影響を与えた。一方、文昭は信仰を客観的視点から歴史を再検討する態度をとった。清沢満之の影響下で教団の否定をした証信と、信仰から出発する伝統的な親鸞観から資料の積み上げによって宗祖の実像を解明しようとした文昭は、出発点において、ほぼ同じ視点であったと考えられる。

本資料は、山田文昭と伊藤証信の個人的な書簡であるが、真宗史や伊藤証信研究も含めた近代宗教学史に資する資料として紹介しておきたい。

〔翻刻〕

書簡一〔明治三八年一月一日〕

とけいの針は、いま午後十一時をさして居ます、もう一時間たつと来年がくるのです。去年のいまごろは古白庵にゐて、御宅へおそばをよばれにいったおぼえです。そうよ、中學のわきとらやにつけびがあつたとかでひとがさわいで居ました。しま君やひのおか君がいたのもこの頃であつたが、いまごろは京都にいますのでせう。去年のこのごろは、みなさんといっしょでにぎやかにくらしてゐましたが、いまは、わたしは母と妹と、一人の書生と四人ぐらしでまことにさみしくつてこまります。御宅もいつぞや、やけましたから、このごろはさぞ御不自由でせう。きのーも安藤君がきまして、さまざまに御宅のはなしをして、「もうあの母屋と物置をがなくなつて、そこらあたりに灰やすみが残つて居るであらう」といふことから、しまいには眼をつぶつて、一人／＼の御顔を見ました。それは／＼はおもしろかつたですよ。

ちよーど、あなたのお手紙のくるまへの夜、わたしは面白いゆめをみて、ふしぎでたまらなかつたところへ、あなたのお手紙がついたものですから、なをふしぎなおもひがするのです、いまからそのゆめをおはなしませう、そしてこのゆめはどういふことでせうか、かんがへがついたらしらすして下さい。

山田文昭書簡

これからはゆめのはなしです、

わたしは、去る廿八日の夜、とこにつきましてから、よのなかのつらいことやかなしいことや、または如来の御じひのありがたいことなどかんがへながら、つい、得と／＼しますと、しぶんはてにピストルをもつて、それを額にあて、ひきがねを引かうとしたゐるのです、いまからこれで死んでしまはねばならぬとおもふてゐると、前でわたしを呼ぶひとがありますから、ピストルの口にあて、ゐた顔をあげてみると、まあ、なんといふきれいな、すがたでせう、まっしろのうすぎぬを着て、金のかんむりをかむつた、女のひとがたつてゐるのです。むねのあたりは、キラ／＼した寶石のかざりが一面にあつて、きれいな、すきとをるようなかほに、きこつとわらひをふくんで、左の手でわたし手をひき、右の手で、むかうからそらを指して居ます。なんだらうと思ふて、その方を見ると、むかうのほうに、ちよーど小山ほどある金の門が、くものなかに立つてゐます、わたしはこの女のひとに手をひかれて、その門のところまでゆくと、女のすがたはきえてしまつて、門のなかから三人の女の子が、はしりでてきました、よくみると、それがおたけちゃんとか、あつちちゃんと、ふうちやんとです。三人ともときいろの絹の改良服のやうなものをきて、水晶や金剛石のかざりか一めんについて居て、ほんに奇麗なすがたでありました。すると、

たけ「おや、山田さん、かへつてきたの、あたひ、山田さんもうかへらないとばかり思つてたの、どうして来たの」

七三

あさ「山田さん、山田さん、あたいたち、こゝでね、おもしろいことしてあそんでゐたの」

みればみるほど、きれいなすがた。こゝは全躰どこであらう。どうして三人はこゝへ来て居るのであらう、門の中にはきれいな草木などが一めんにさきみだれて、ついに見たことのないようなきれいな小鳥が、うれしそうにうつくしいこゑでないて居るのです、わたしは、あっちやんの手をとりながら

山「みんな、どうしてこゝへ来たの」とたづねると

たけ「伊藤さんがつれてきてくれたの、山田さんなぜおっかさんをつれ

てこないの」

山「おっかさんはあとからくるよ、伊藤さんはどこにゐるの」

あさ「伊藤さんはね、あたしたちの兄さんや、秀ちゃん、銀ちゃんや、

みんなをつれて来るといふて、かへっていったの」

山「そう、そんなら、こゝには三人だけしかゐないの、」

ふさ「おっきねーちゃんも、きてゐるよ」

しかし、おせんちゃんのがたはみえなかつた。ふさちゃんはさきにしたつてはしりながら、

ふさ「山田さん、こっちへおいでよ、山田さんのまいていった花がき

れいに咲いているから」

なるほどきれいにさいて居るしかし、わたしの蒔いのは、やせてーみぐるしいのであつたが、これはまた、あまりにうつくしうさいてゐ

るので

「あっちやん、これ、ちがうでせう」

あさ「いゝえ、あたいたちがね、たんせいして つくつておいたの」

「そう」

といひながらだん々々むこうへゆくと、ちよーど古白庵のやうな、しかもそれが水晶でつくつたやうなうちがある。ガラスまどのなかで、うつむいて、なにかしてゐる人がある、だれであるかと思ふてみると、それがおせんちゃんであつたのです。「おかへりなさい」といふて縁へで、きた、まっしろなつゝ、そでのきもので、ヤッぱり、水晶のかざりがむねからうでのあたりに一ぱいついて居る、そして、手に白いのと紫のと二色の花を持つて、

せん「これはね、如来さまがくださったので、伊藤さんにも、半分あげ

ましたから、あなたにも半分あげませう」

山「如来さまから、もらつたの」

せん「あたしたち、もう、とーくに、如来さまの子になつたの」

.....

めをあいてみると、もうとくに夜があけて、つくえばのてつびんか、シン／＼といふて、にえたつてゐます、

このゆめがさめてから、みよーなゆめをみると、おもふてゐましたら、あなたからのてがみがつきました。

安藤君にもこのゆめをかたりました、家庭へもだしたいと思ふていま

す。おすみちゃんたちにもよろしく。

わたしはまことにせわしくて、こまッてゐますが、しかしたのしく日をおくッてゐます。とき／＼ですがも（巢鴨）がこひしくて、しかたがありませぬ。

フヤ、もう一時になりました、去年からかきだしたてがみ、もうこれやめませう、もう新年になりました、おめでたう。おせんちゃんは十九におなりですね。

明治三十八年一月一日午前一時しるす

そとはゆきがふッてるやうです

みかは やまだ

おせんちゃん

〔封筒〕欠

※備考…本文中「せん」「ふさ」「あさ」「秀ちゃん」「銀ちゃん」は古白

庵の大家・田崎惣太郎の子息。

書簡二（明治三十八年一月）

先日はおもしろい夢の御話をきかせていたゞきましてまことに有難う存じます。かんがえがついたらしらせよとのおふせですから、いろ／＼

と考へてみましたけれど、どうしても私にはわかりませぬ。いづれの如来様のおじひのことであらうとは思ひましたが、それにしても私たちのやしきのやうでもあり、よそのやうでもあり山田さんのお宅だろうといふ者もありますし、大学のことだろうというものもありまして、どうもしかとしたことがわかりませんでした。

ところが、六日のばんに銀ちゃんがあの手紙を伊藤さんの處へもっていつて見せましたら、伊藤さんは大そうおもしろい夢です わたしはすぐ此わけがわかりました。と言はれますから、そんならきかして下さいと銀ちゃんがいったら、これはあまりにも面白い話だから、あしたの夜の修身の時に、みんなに話して聞かせて、そこでわたしのかんがへをくはしくはなしましょうといふ伊藤さんのへんじでした。わたしは翌朝銀ちゃんからそれを聞いてたのしんで其日の夜学の時間をまっつていました。

そして其夜伊藤さんが夜学会でなさいました御話は、大へんに有難くてよくわかりましたけれども、ずいぶん長くて私にはとても其とをりにおほへてゐられませんでした。なんでもそらにみえた金の門と云ふのは、大学でもなく私たちの内でもなくまた山田さんのお宅でもないのです、これは如来さまのおじひの國の入り口だそうです。如来さまのおじひは、このせかいにみちてゐるので、どこでもみな如来さまのお國であるけれども私たちはそれをしらないで、いつも如来さまのお心にそむいてばかりしみて、とをい處からでも見てゐればまだ／＼ようございませぬが、如来

さまのおじひの国があるということさいちつとも知らない人がお於いのですと、ほんとうにそうですわ、わたしたちも如来さまのおじひのことはあなたや伊藤さんからたび／＼伺ひまして少しは存じてゐるやうなもの、しかと其お国がどこにあって其門はしかと見付つたかと念をおして問はれますと、どうもすぐにお答がでかねますもの、思へはまことにおはづかしいわけでございます。

それからいよ／＼如来さまのおじひにしかと目がついて、いゝえ、私達は自力の力ばかりではなかく／＼如来様のお国の門を見つけることもできませんが、あなたの夢のうちにあつたやうに親切に手をひいてくれる人があつて、其おさしづとみちびきによつて、だん／＼如来さまのお国にちかづき、とう／＼如来様のおじひが心からうれしうなつかしう思はれて身も心もすいこまれるやうに如来さまのおまことにまかされるのが金の門をくぐつたのださうでございます。そして一たん門のうちへはいつたら、あゝ何とたのしいことで志よう、おたけも、おあさもおふさも、ときいろの絹の改良服をきて、水晶や金剛石でからだちうをかざりたて、もらつて、きれいな小鳥のうれしうなこゑをきいて、一面にさきみだれた草花の中におもしろいことをして遊んでゐられますとさ
 そうしてわたしですが、水晶でつくつたきれいな家の中で、如来さまからいひつかつたいろ／＼の楽しいお仕事を見せていたゞいて、たつといおじひのたからものを、あはれな人たちにわけて上げることができそうですよ。それにおとっさんやおつかさんをはじめ兄さんやねえさんと

秀ちゃんや銀ちゃんやおすみやみさとやあゝちゃんやみんな、そして又そこにはあなたやあなたのおつかさんやあなたのおいもとさんもみんな一しよに兄弟になるんですもの、(きい子はだれかがおぶつていけばようございます)

あゝわたしははやくその如来のお國へいきたくなつてきましたよ、したがその國はとをくはないのださうです。今でもゆかうと思へばぢきにゆけるのですと、いゝえ、別にきしやにのつたりあるいたりするのではなくて、心で如来さまのおじひを信じさいすればそれでいゝのですと、何だか少しわかりにくゝなつてきたやうですが、なんしろ此世界は如来さまのおじひでみちてゐて、華のさくのもみのむすぶのも、ちゑもじひも学問も修身も、いゝものはみんな如来さまがたくしどもに下すつたのだと、ふだん伺つてゐますが、思へは思ふほど如来さまのおじひは大きくて有りがたいのでございますね。どうぞ私たちもあなたがたのお手引きによつて一時もはやう如来さまの子にしていたゞきたうございますから、よろしうおねがひ申します。

ふしんは去る十一日からとりかゝりました。毎日こびきや大工がたくさん仕事に参りますのですいぶんさわがしくていそかわはしくてなりませぬ。それで手紙を書くひまさへ思はしくないのですよ、御存じの通り筆がなか たつしやなので一そうひまがかゝります。この手紙も私がひまをぬすんで書きにかゝつてみましたが、なんだかあとやさきがごた／＼しまして、とても私にはかききれないやうにおもはれましたから、

伊藤さんにおねがい申して、話だけ私からはしまして、それを文に作っていたまきました。けれども心のとゞくやうに、字はじぶんでかきました。家は大きさは已前のと大したちがひはありませんが、まのとりかたなどは少々がひます。いづれくはしいことはできてからあらましのづでもひいて御覚えに入れましょう。なんでも四月一ぱいにはでき上らせてうつりたいものだと父上もいってあられます、とにかくじぶんたちのすまゐ家の新しくたつのは、はりあいのいゝものでございます。

またく申し上げたいことはたくさんありますけれど、あまりながくありませんから、此度はこれで失禮致します。別紙は例の三人の手紙ですが、(それ小さいあかい心がみて)御覧下さいまし、末筆ながらお寒い時節ですから充分おからだをお大事になすて下さい。此頃こちらではたいそうかぜがはやります。あなたもどうぞおかせを召さないやうに御用心なさいまし、なほあなたの母上さまやおいと子さんにもよろしく

さよなら

せんより

山田様

〔封筒〕欠

書簡三 (明治三八年一月七日)

御書面拝誦

○ 御法語集編纂に對する小生の卑見如左

- 一、形は春陽堂発行の名著文庫と同様
 - 二、本文は五号、冠註六号、
 - 三、凡て廣告を附せざる事、こは堅く書肆と御契約ありたし、
 - 四、題は親鸞聖人御法語集、冠註云々は廣告文にのみ加へては如何、
 - 五、編者の名を要すれば、貴兄を共編にて発表、書肆若し廣告上校閲者を要すれば、中寫上杉両氏に願ひたし
 - 六、名著文庫と同じき上製を作るべし
 - 七、紙質精選、表装堅牢、約の如く無報酬のかはり廉價に發賣すべし
 - 八、校正は最も嚴密なるを要す、貴兄と小生と一度置きに同處を校正して全く兩人が誤謬なしと認むるまで無制限にて校閲する事。
 - 九、例言を附すべきか否か、問題なり、小生は寧ろやめたらば如何と思はる。若し附するならば止むを得ざる事二三ヶ條に止めたし。
 - 十、目録はつけたし。
- 以上は小生の考の概要に候ふ。一度書肆とも御談合の上御通知もらは幸甚、本書の特色は、平仮名、句読、校正の嚴密、この三者にありと思ひ、更に廉價の一を加ふれば幸甚。
- 編者の名は本文の中に加えたくなし例せは題号の下に何々編といふ事、

宜しくなしと思ふ 若し加へるならば唯表紙の内扉にのみ加ふ。

伊藤證信

山田文昭 共編

此字トルや乎否乎

親鸞聖人御法語集

森江書店発兌

上製は唯背面にのみ金文字にて題を入れ、并製は表紙に題を出す、兎に角、編者発行者の名を表面に出すは不可、内扉も書肆さへ承知ならば、やめ度きものに候、以上愚考

○蘇峯の吉田松陰を読む、ラサールより得る處遙かに多し ひとしく臨終の絶叫なり、されど「人生は一の猿芝居に過ぎず」といひしラサールは「かゝらむことは武士の常」と吟じて死したる松陰の比に非ず。蓋し松陰は尊攘主義によりて扱はれしも、ラサールは未だ社会主義によりて扱はれず、彼か功名心の手は偶ま社会主義を振り回したるに過ぎずと思ふ。臨終之絶叫を証し余りあり

○頃日『トルストイ伯及其の家庭』を読みつゝあり。伯が内的経過を伺ふの一端となる。伯の人生觀非常に讀みたし。枯川の文を讀みし時の快味忘るべからず知己天涯より来りて魂相抱くの感 正に是れ、兄是非遇ひたまへ、妙好人なり、最勝人なり

○小生は一日一日面白し、まして近頃尤も面白き考えを浮かべたるが故

なり、その他なし、理想の家庭を作ることとなり、こは枯川の文をよまざる以前より之を思ひ居れり、枯川の文と吉田松陰とは小生のこれを愈鞏固ならしめたり、そは先日申したる貧寺の少年を收容して之と家庭生活を営むにあり。小生の目的は遠大なり、今直に着手するを得ず、そは周囲の重き事情が之を許さざる故なり。先づその神聖なる手段として五六名の少年を收容して、中学程度の学課、殊に佛教を主とし、就中、小生等の理想を主とするものを授け、寢食苦樂を伴にせんと決心致し候ふ、小生は兄が首肯したまうこと、信し候ふ、小生の家裕かならず之に衣食まで給するの資なし、これのみは稍残念に候へども致し方なし、僅かに飯米の自辨を得るものを收容せんと思ふ、小生幸に独身なり、妻子のかはりと思へば非常に面白し、既に一二の心知るものにこの企画を発表して希望者の出づるを待ち居候ふ、出づるまではいつまでも待つてゐる考に候ふ、若し三四名に達し候はゞ着手する考に候ふ。

○孤立なり、門徒が小生を思ひくる、ほど小生に迫害なり、家族か小生を思て呉る、ほど小生に迫害なり、眞の孤立にして而もおもしろく愉快なり、うれし思へは尚うれしき感、湧く

○聞説、大学一般に意氣憤慨すと僧侶教授の一人忿りていはく、一生懸命に講義して居るものを生徒は一人も真面目にきいて居ない。と、大學教授の名を得んために苦しんでこのつまらなきことを継続せねばならぬとは何たる因果の事ぞと愍憐の情に堪えず。

○信仰問題に関する雑著続々として出づ、されど一も讀みたきものな

し。信仰も功名心を貪ぼる一脈の武器となりては危険この上なし、

○勝友叢誌の発行所知りたし

○兄はいつ頃御暇省か、暫時御滞在を請ふ。

一月七日

夢白生

古川盟兄

〔欄外〕兄遇ふたならば枯川の新平民に對する考えをきいてくれたまへ

〔封筒表〕

東京府豊島郡巢鴨村上新田八二〇

古白庵

伊藤証信盟兄

〔封筒裏〕

一月七日

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

〔消印〕

三八年一月七日

書簡四 〔明治三八年一月一四日〕

貴書拝誦再三再四是却りて小生に對する法身證誠の声なり亦他を言はず
○マホメットは三年間に僅に十三人を化したるのみならずや勉旃勉旃○
田崎家に對して小生が君の化導を助くべき機會來れり僕も全力を擧げて
尽くすべし 別紙は其第一着手今度はもつと柔らかなるものを送る。始
めなれば随分露骨なれども兄一應御覽の上同家團樂の際御朗誦の勞を執
られなば幸いなり その當時の反響き、たし○夜學會の事、小生差當り
て今自分にこれといふ手のひけぬ事業なし、よりて餘暇の際なるたけ貴
意の如く夜學會に尽したし○兄の外界の境遇は祖師的なり小生が境遇は
小生にとりて日蓮的なり○過度の労働により病氣勝ちなれども心は益爽
快なり。頃日安藤現慶君來て語り深更に及ぶ○なるべく正月六日以後に
來車ありたし 一週間位は滞在を請ふ安藤現慶君の方へも二日程布教を
願ふ 僕の處も二日位布教を願ひたし、滞在の都合にて尚近隣に招聘し
たきものあるやも知れず 余は後便

一月十四日夜

夢白生

古川盟兄

〔欄外〕

○夢物語は全然虚想なるに非ず廿八日の夜病熱のためにみたる夢の断片
を想像の筆つぎ合せその混雜したる部分をすてたるものなり
○君の用いる原稿用紙は非常に重し、時々超過し居れり。

〔封筒表〕

東京府北豊島郡巢鴨村上新田八二〇

古白庵

伊藤証信盟兄

〔封筒裏〕

一月十五日極秘

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

書簡五 〔明治三八年一月二四日〕

兄の苦心は察するに餘りあるが尔し兄の興味も察するに餘りあるのである、僕近頃健康舊に復して法務及び布教のために目の回るほど忙がしひが尔しそれが面白くてたまらない、妙だ、心から語れば人は心から聞いてくれる、幾多の求道者と胸襟を披いて語る時の快は到底寄宿者生活時代の夢想だも出来ぬ所である。殊に青年男女が真面目に道を求むるのはまことに愉快だ、き、こじへた最媼よりこれらの方が餘程手輕に如来の聖懷にはいるやうだ、ことに自分の心理状態に顧みて面白いのは今迄は他人と語るを好まなかつた僕が、他人を見るとそれが一面識のない人で

も無茶苦茶に語りたくなる。そしてどんな小児までもが他人と思はれない。なんだか百年の知己若しくは兄弟姉妹の様な感じがする、對手の間もそうだ、今迄とは違ふて何だか非常に僕に親んでくれる様な心地がする。『梅一輪一輪づゝのあたゝかさ』この快到底門外漢の知る所にあらずだと思ふ、

○旧曆年末二三日暇ある筈、近頃の活動は向下的であるから、この際ちと向上的になりたいと思ふ、それについて伯の人生觀を送りて呉れたまはゞ妙なり。

○僕の所へくるには少しは寒いが夜行の方が便利だと思ふ、兎に角安城から一里あまりあるから暮れてから着いては途だから非常に不便だ、僕は目今の時間表を知らぬが八日の夜氣車で品川を十時頃に出るとすれば翌日の午前八九時頃に安城に着くザツ品川から十一時間位かゝると思ふからそのつもりで拂曉から午後二三時頃までに安城へ着く様にしたまへ、十六日にどうしても飯らねばならぬか、安藤君の所へ二日間布教のために来て貰ひたいとの事、若し十六日までより滞在出来ねば十四、十五、二日全君の所へ往つて、そこから安城へでると近いから却りてその方が便利である、そうすると九日に僕の處へ来て十四日の午前に安藤君の方へ行く事にしやう、若し十六日後まで居つても善いならばまだ考をかへるが十六日に飯らねばならぬならば今度東上の際にゆるゆる立寄つて貰ふことにしやう、僕もその頃（今度君の来る時、即月九日以後なり）布教と法務とで昼間は随分せわしいから夜をこめて語る事に

しやう 尤も昼間も大抵正午から黄昏まで忙しいので午前中はあけてある。今度君が来たまふ時、豫て君に願ふてい置いた通り取替を頼た一々を記して持つて来てくれたまへ、僕の方には別版して無いから世話であろうが君に任して置く、勘定は勘定だから極微細なものでもおとさぬ様にしてくれたまへ、史籍集覧の筆写一件モット後にて宜し。

九日

十日

十一日

僕の處で布教を願ふ、

十二日

十三日

十四日

安藤君の所で布教を願ふ

十五日

十六日 — 飯国

○御法話集の件々

一、校閲人を廃すべし、編者書店の名は奥附にのみ加ふ、これ編輯、及び発行所の責任を明らかにするためなり 編者の下君と僕と連名、発行者、及発行所は無論書店一任す

一、上製の表紙濃海老茶賛成、凹形の模様に出すは可、尔しそれで鮮明なるや如何、僕は表紙は凹形の模様のみを出し、題は背面のみにて可と思ふ。名著文庫の如く、又は聖書の如く、されどこれは売れ行きに関する故、書店の意を汲まざるべからず。

一、題号は御考案最も善し大賛成なり。

一、編輯の趣意を巻頭に附するは初聖を読む、六号位で巻末に附すべし、それは急いだ事でありければ案文は面會の上でよからむ。

一、解題を簡単にして鼈頭に置く、可、

一、一書一書の内題の名は存して然るべし、内題と本文との間、二行位で可なり、一書一書の間は必ず丁を改む。(頁を改むるに非ず) 無論埋草や埋画を挿むべきに非ず、空地のまゝに存すべし

一、奥書、削るべし、

一、歎異抄、述べ書にしたる方可あらむ、

一、順序は御仮各聖教の順序、摘録の名前ならむ、

一、御弟子の傳わかれれば至急後便にて送る、

一、冠説本の間の線の事、一寸定め難し、入れずしたらどんなものかしらん。

○敵本能寺に在り委細承知、本能寺の徨深き幾尺、こは小生が問はむを欲する所なり、家庭出すこと、あのみ、ではあまりに文冗漫ありと思ふ、これに名号を出すも如何はし、よりて一寸見合す

廿四日

夢白生

古川兄

〔欄外〕せん子の返事と共に出すは妙なり

〔封筒表〕

東京府巢鴨村上新田八二〇

古白庵主

伊藤証信盟兄

〔封筒裏〕

一月廿四日

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

※備考…「安藤君」は安藤現慶。

書簡六 〔明治三八年三月三〇日〕

この書面は安藤君の来ぬ前にかいた。(朱筆)

僕は四五日以前から君が遺していった平民新聞を漫読し終つた。最も僕を動かしたのはその犠牲的精神である。彼等が警察権の強力に對して毫も反抗を試みず「如何にしてイヂメられんとするものなり、」と宣言する所、道に尽すもの須らくこの覺悟なかるべからずだ、基督もこれであつた宗祖もこれであつた、我等も亦これでなければならぬのである、

瀧の川園遊會解散の記事、共産党宣言の發賣禁止、曰く何、曰く何、政府は斯る事で社会主義が防過されると思ふて居るはアマリ、トンマな話ではないか。四五人の人が集まりて開く地方の小團躰まで警察が一々干渉するのは驚くべきである、さはれ、秋水か最後の演説として述べたる精神にして変易する所なくば、警察の抑壓は却りて彼等の主義を明晰に且つ活動せしむる所以であつて殆んど彼等に對するその主義は厳乎なる宗教の如き觀がする。日蓮の徒と比べてその宗教的行動の価値はどんなものであらう。

彼等は道のために個人を犠牲にして居る。それだから警察が如何に個人を迫害したとてそれは豆腐にカスガヒといふもの。彼等は自己の主義を絶対的真理と信じて、その真理は終極の勝利者であることを確信して居る、彼等がいふ所の『氣運』なる文字は嚴乎たる宗教的意義が認められて居るではないか。彼等が满腔の希望と满腔の歎息とを以て、真理の光の現はれゆく所謂氣運なるものに絶対的に信憑する態度、吾等は肅然として襟を正さざるを得ないのである。

主義その者が宗教的なるか否かは兎に角、その態度は嚴乎として宗教的である事は一點の疑はない、

我等も亦自己の所信に對してこの殉道的態度をとらねはならぬ。甘んじて十字架に上りし基督、流罪を喜びし宗祖、今の世にその面影を見る事は出来ぬが、強ゐて求むれば平民社一派の同人諸君か。額面のト翁(日本新聞の付録を切りぬいたる)今予を見下しツ、ある、北欧の大聖、我

等嬰兒は汝が慈愛の胸によつて活けることが出来た、我等兄弟が再生の親は汝である。

欧州で社会主義が獨立しているのはツマリ基督教の無能を示して居るので我國に社会主義が獨立して起つたのは、亦佛教の無能を示して居る。

行商傳導は道を傳ふる婆羅門を想ひ起させる。

そして吾等が平民社に對して羨望にたへぬのは同一の道に起ちて多面に活動して居る事である。理論に、小説に、詩に、画に、同じ道にたてば、その道に對する能力は、學者も、画工も辻占賣も均等である。

『富の平均をいふ事が人生唯一の幸福である』果たして然るか、そんな淺墓な事で地上に天国を築き出す事は出来ない、社会主義者の眼には、富豪は安樂で労働者は苦痛だと思ふて居る 知らずや、人生の真意義を知らざれば、その苦痛の度に於て富豪も労働者も同じことである。幸福、非幸福は貧富の上にあるに非ずして、人生の真意義を悟ると悟らぬとの上にある。これ僕等が社会主義者を根本的にその信仰の基礎を異にするものである。死は終極の苦痛でない、苦痛の極度は死ぬに死なれぬといふ點にある、自殺は貧民に多いであらう、然し、後者の苦痛は富豪も決して貧民には譲らない、寧ろ富豪の方がヒドクはあるまいか。富豪は自殺することまで其自由を物慾に奪われている。

社会主義は個人としての永遠の問題を解決することが出来ぬ、随ふて、現在満足など、いふ事は六ヶ敷い、貧民に安慰を与ふるには、富者のバ

ンを奪つて与ふるより外に方法はない、換言すれば赤貧者は赤貧者として絶対的に安慰を与ふる事が出来ない、我等か信仰は、赤貧者は赤貧者として富豪は富豪として絶対的に安慰を与へ得るではないか。我等の信仰よりいへば階級の打破などは、重きを置くの必要なし、社會てふ團練の改良に非ずして個人の改良なり。我等は社會を救ふといはうより寧ろ個人を救ふのである。

僕等はこれから折伏的より摺受的の態度をとらねばなるまい。

いつ、僕等は宗教的平民新聞を出すことが出来るであらう。君、これには充分の準備を要する、月一回位の雑誌ではまどろくさい少くとも三回(三回以上は雑誌として発行し得ない)質素な「直言」風の丁裁であらゆる方面から主義を宣傳しやうではないか、

哲學者もいる、小説家もいる、詩人もいる、画工もいる、同志の人、今から覺悟しなければならぬ、事を急ぐは大禁物である。たとひそれが、いつ実行し得るにした所で、内容、及びその経費は今から準備したとして早くはない。

同志、巢鴨を中心として、一面その地を感化し、一面天下に向ふ。雑誌をすゝりつ、この聖務に従ふを得ば最も快とする所ではないか、君遂に古白庵を去るべからず。

三十日

夢白

古川道兄

僕は「直言」をとる、

これからは君の書信を見てから書いた（朱筆）

○信仰の宣傳として文筆を利用するのはいふまでもなくせねばならぬ、雑誌発行の事、無論僕等が執るべき事業である。

○僕の考は左の如くである。（君の意見悉く賛成）

一出すならば月三回、少なくとも二回は出さねばならぬ、たとひ雑誌を小くとも回数多きを以て善しとす、これ讀者との関係を密にする最も必要な条件である。

一平民新聞大では大きすぎて経済かゆるさぬ、前の「直言」大で八頁位可ならむ、

一実價は二錢より超過すべからず、

それに就て経済は左の如し、

一保証金、百七拾五圓、週刊になれば五百圓、
月三回までは雑誌、三回以上は新聞紙としてあつかはる、無論保証金はなければならぬ。

一通信省認可 十圓、

一第一、二回 一回を千部として 四十圓

一雜費 郵税其他 十圓

發行後はどうしても月五十圓はなくてはなるまい（二回発行トシテ）

○内容、

同じ信仰にたつ學者、小説家、詩人、画工、等を要する、

○庶務

たゞ信仰のみを以て吾人は雑誌を發行する事は出来ぬ、雑誌發行についてはそれ相當の実力がある、実力とは前にあげたるもの悉く是れ。実力中に充実して止むを得ざるに開くとき花は美果を結ぶてはあるまいか。

經濟の事もよく考えねばならぬ、まして内容に至りては無論熟考を要する、同志のもの、果してその実力に充実したりや否や。少くとも「信仰」を遺憾なく發表する筆、理論の方面、文學の方面、画の方面、存せりや否や。

どうで出すならシツカリやるべし。出せば必ず旧佛徒から迫害が来る、僕は無論そんな迫害などは関心せぬ、しかし、所謂雑誌に関する実力が欽乏して、開いて直ぐに萎むのは寧ろ始めから開かざるに如かず、却りてそのために社會に誤解を与へる様な事は出来まいか。

雑誌を出すのは無論賛成である、しかし今さしあたり出すといふのはどうであらう。以上は唯僕の杞憂に過ぎないのであらうか。

僕は平民新聞が羨ましい、同じ理想、同じ態度、然も同じ達筆で多方面から盡して居る、彼等は主義を發表すべきだけの筆を以て居る。

僕の思ふ所によれば、巢鴨を僕等が本陣として、一面足もとの村を化し、一面筆を以て社會に立つ、當然の事業であらうと思ふ。時機来れりや否や、

君にして時、来れりといはゞ、雑誌の内容体裁等の事、僕も少しく考へて居る事がある。

別紙田崎へやッてくれたまへ

僕は無我苑より巢鴨精舎をとる、但し無我苑わろくなし

〔封筒表〕

東京府巢鴨村上新田

田崎惣太郎様方

伊藤証信道兄

〔封筒裏〕

三月三十日

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

書簡七 〔明治三十八年四月三日〕

○愈大日堂へ移つたといふ芽出度い、安藤君も同居する事に極つたそう
だ、なるべく巢鴨の村民を近づけて感化して貰ひたいといふ事は言ひま
でもないことだ。

○雑誌の事安藤君は大層急いで居た、経済の方で保証金百七十五圓は公
債證書百圓券が二枚あれば大抵宜しかろうと思ふ（少し不足）無盡燈社

山田文昭書簡

から借り出してはどうだと安藤君はいふて居た。そして先づ第一にしら
べねばならぬのは活版屋の方だ、平民新聞の通りで（紙質も亦）一千部
どのくらい出来るものか、二三の活版屋から見積書を取った上でその方
法を講ぜねならぬと思ふ。

○僕は近頃直言をとり始めた、彼等の行動は益宗教的になつて来た、社
員の一人が頻りに浪花節を学んで居るとは驚く可き事ではないか。斯く
て道を宣伝してこそ人もうなづくであろう。伝道方法として太鼓を買う
相談など実に彼等の至誠が躍如としてみえるやうだ。

○今度の直言の第一面の画はどうだ、巧みなものではないか一見悚然と
して悲懐の氣が襲ふてくる。夫雛白骨となりて「名譽の死」をとげ女雛
涙をぬぐふて豆畑の間に立つ、世の人戦慄を謳歌して櫻花に醉殺せられ
んとす、『そら豆の花見にごんせ里は春』諷刺之に至りて盡く。

○直言に活氣があるのは一字一句までが戦闘的氣慨に充ち、て居るから
である

○僕等は如何なる態度をとるべきか、世を挙げて狂顛して居る、愛の福
音、無我の福音、この狂顛の世に對する偉大なる革命ではあるまいか、
僕等がたつには最もまぢめなるを要す、人をして悔ひ改めしむるには、
その誤謬を指摘するより最良の方法がないとせば、勢ひ僕等の叫声は革
命の叫声で、その運動は革命運動ではあるまいか。遊婦が嫖客を弄する
が如き、あまたるき紅粉的の口調で人をまるめるといふ様な、ふまぢめ
極まる事は僕等は死んでも出来ぬのである、言ふだけの事は言はねばな

八五

らぬと思ふ

○そして今度は僕等が出すには、成るべく通俗平易で趣味を豊富に、一面教育ある青年の指導たると同時に、一面家庭の讀物とせねばならぬ、直言はたしかにその方法をといて居るが、未だすこし足りない處がありはせぬか、信仰の文字でさへあれば多方面なのがよかろうと思ふ、平民社では浪花節さへやるでないか。同志に文學家がないのはどうも残念だ、

○理論として、聞いて終はれては三文の功能も無い、理論だけなら近頃アリアマツテその重さにたへかねて居る社会、たとひ僕等が口をすくして説いても今の世は多く理論としてのみ聞き流されて終ひはせぬか、僕は思ふ、具体的に示さざればその効力半ばにも達するまい。

○脚色は完美して居ても後者が揃はぬと駄目だ、

○無我苑可、愛染堂は如何にや。

○田中屋へ僕の原稿紙五百枚すらして置いてくれたまへ

「表題」鄙見

愛 一字を以て最も多含の意義を示す 然れどもこの文字全然の反對の意義に偏愛、汎愛ありて、世間通途の有漏の愛に混視せらるゝ恐れあり。

無我 愛は他に對し、無我は自を示す、されど単に無我といへば愛の意義裏に隠没す、

無我の愛。 此題名、前二者を結合したるもの、始めて完全に意義を露

出す、無我といへば世間に所謂主我的な愛に非ず、愛といへば羅漢的の無我にも非ず、されど「無我の愛」とは論文の題か何ぞで斯る煩雜なる題名は雑誌として最も不適當なり、之を知らざるもの、一たび聞き、十返も首を捻りて始めて内容を推察するを得べし、雑誌の名は一見直に内容を想ひ起すを要す、「無我の愛」何とゴテドくして居ることよ、「無我」と「愛」とが牛蒡と芋と、椀の中に雑居するが如し、この題名、僕は最も拙なりと思ふ。

向上 この名一寸善し、されど近頃向上の言葉は一種の流行言となりさまざまの意義を附加せられ、おまけに向上主義といふ雑誌あり、さすればこれも駄目、

大悲 こはよほど大袈裟なり。

まこと この名頗ぶる善し、されど少しく冷かに過ぎて暖かみに乏し、まこと、情よりもむしろ智に傾むく文字か、僕はこの文字に今一層情性を附加したる語を思ふ即

まごゝろ 是なり、宇宙のまごゝろ、即僕等のまごゝろなり無我この中にあり、愛この中にあり、サシテキザにもあらずゴタツキもせず、穩健にして一見内容を想はしむ、これ無我と愛とを融け合したる語ならずや。

〔封筒表〕

東京府巢鴨村上新田

大日堂

伊藤証信道兄

〔封筒裏〕

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

〔消印〕

明治三八年四月三日

書簡八〔明治三八年四月二日〕

一 小松君自力を離れたり

一 その後安藤君に遇はず、先日の安藤兄の處に赴きて語る。そは安藤君が現在の境遇を脱せむと企つるに就き母君非常に之を憂ふとの嘆きを聞きたればなり

一 境遇不如意云々、僕は毫も自己の境遇を不如意と感せず、僕には目今の境遇がベストなりと信ず、安藤君自己の境遇不如意をいひたる故に僕は不如意ならざる故をいふ。何故に不如意ぞといふに談る所をおしつむれば門徒に衣食するが不如意なるが如し、僕よりて直に兄の例を引く、若し安藤君にして門徒に衣食するが不如意ならば伊藤兄が自家から衣食するも不如意なるべしと

山田文昭書簡

一 僕曰く、門徒に衣食するが不如意ならば如何すべきか安藤君曰く寺院生活を脱するなり僕曰く、脱して如何すべきか君曰く、衣食の料は家人より貰ふと、僕曰く、それならば現在の生活を脱するは必意無意義なり、若し執着ある金（与ふるものが報酬を要するもの）に生活するがいやならば両親から貰ふも不可、何となれば両親は『我子の事業なるが故に』の条件のもとに与ふるが故なり、若し君のいふ如くんば純然世の執着を離れたるものによりて衣食すべし、例せば釈尊の如し依食位は国王たる家族より貰ふも何のさまたげかあらむ、その執着のものに生活するをいさぎよしとせず、ぼろを着、残飯を食ひ、執着を離れたるものによりて生活したまひしに非ずや、君の立論よりいへば君が両親から貰はむといふも伊藤兄が家からとるも与ふる人が信者たるまでは絶対的に非なり。

一 僕曰く如来に救はれたる以上は金殿玉楼に住むも茅屋に住むも同価値なり、我物と思ふてこそ、そこに差別の見生するなれ、如来に貸与したまふ所にありて如来の業をなさば可なり。強めて寺院生活を棄て、庵室の生活をなさむとする終差別の見に住するものに非ずや、若し君の立論よりいへば両親より貰ふも不可、釈尊の生活をなすべしされど目今の社会経済はそを許さず、即ち餓死（甘んじて）するが最もよき方法あるべし、僕はさは考えざるなり。而して自力の陰影は寺の奇態なる方向に表はる。生活の程度を低うし、一簞の食一瓢の飲たらずんば世に教ゆるに足らずとし、そを実行する時、その実行が既に一種のプラウドとして現

八七

はる、事あり、誇める人は自力根性あり、最も吾人が警戒を要する所、

一僕が安藤君に談したる所以上の如し、

一君に對する悪評冷罵（地方の）安藤君より始めて聞きたり、それ以前に一二聞きたるも左あるべしと思ひ意に介せざりし（最も聴者の聞き違ひなり）僕は今はそんなクダラヌ毀譽褒貶など意に介するものに非ず、

一しかれども僕は穩健なる方法を取る釈尊も華嚴の座を徹して阿含より漸次に説きたまひしに非ずや、現在に於ける如来の恩寵を感せしむるは高くとも祖師の現益以上に溯るべからず（僕が現今の方法）機熟し来りて漸次歩を進め、第一義諦に達せしめむとす、

一吾人は自から如来冥鑿の下にベストと信ずる方法をとれば可なり、中心に顧みて疚む所なくんば吾人は絶対に安慰なり自由なり、境遇不如意の疑いは遂に自力のみ、

一原宣賢君を訪ふ、信仰の事、言葉の上に於て略一致したり、されど最後を考ふるに僕の所信と全く異なり、同君はたゞ社會と同化する事のみに重んず、而してトルストイ平民社一派を冷罵し、村上師等を重んじ、恵日院と親しみを受けたる事等を難有感して居る處など僕が著しく耳にとまつた。同兄は麻衣を纏ふて布教的行脚を試みんといふ意氣感すべし、されど同君は三年以前のそれよりも貴族的になり終り、今では平民的の面影を認むる能はず。全君の信仰談、要領を得ぬ處多し、僕稍落胆す。

一明日は大河内君を訪はむとす

一僕は思ふ居るべき位置などは何處でも善い、金の中にうづまって居ら

うが、あばらやの中にて居やうが、我物でない以上はどこに居たとて同じ事だ、布敎の方法だとてそうだ、強ちに偏執すべき筈はない、最良と信じた方法を執つたら善いのだ、僕等は人が相手でなくて如来が相手だ、何を恐れて何を悲しまう。園林遊戯地の門に入りて如来の慈悲海に遊泳して居るのだ、『き、心』『信じ心』が力になるとき既に自力の隱影は顕はれて居るのでないか、無我、

夢白生

古川道兄

原稿代の事たのむ

〔封筒裏〕

東京府巢鴨村上新田

無我苑

伊藤証信道兄

〔封筒裏〕

四月廿一日午後

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

※備考…「小松君」は小松法貫。

書簡九〔明治三十八年五月三〇日〕

無我愛同朋諸兄

幾度の御書面正に拝誦。愈雜誌御発行の由大賀の極に御座候。連名云々小生の名前は諸兄にて宜敷様に御取計ひ置も下度諸兄の御計は即ち如来の御取計ひと存すべく候ふ。

小生はその後一名の信者を得候ふ。

○「小生の飛躍は一ヶ月に足らずと雖も其費やしたる気力は従前の一カ年にも勝り候ふ、而も得る處の信者僅かに六七に過ぎず。されど此等の信者（小生は眞の信者なりと認む）は教えずして常行大悲の益を行じ各分に應じて伝導につとめ居り」其中の一二のものは毎日示談会若しくは訪問伝導につとめ居り、小生も亦之に対しては慙愧の至りに御座候ふ。信者と称する中四十以上のものは唯一人、餘は皆青年に御座候。其中婦人は僅かに二名、されどこれらも亦分に應じて大悲を行して居る様子に御座候ふ。

小生の方法は観念的信仰を根本より破壊して実在界に入らしむるに候ふ。彼等の有する自我Ⅱ物、心Ⅱを奪ひ死の関門を通過せしめ而して如来の慈悲を与ふるに在り候。彼等の自我をして悉く死後に集住せしむるには従前学ひ得たる哲学科学を利用してソクラテースの産婆術の如く彼等のを理論的に問ひつめて死を眼前に映せしめ、同じく問を以て如来、浄土、念佛等すべてを奪ひ去り而して絶対の罪惡觀を与ふる時は如

何なるものも苦悶致候ふ。その苦悶の殆んど極に達したる時如来の慈悲を指摘せしむる方法に候へども、尤も困難を感じるは彼等が『斯く知りたり』てふ自己の知識を捨て得ざる事に候ふ。

破壊の鉄槌は哲学科学の知識なり、建設は悉く宗祖の御法話を以てす、小生が布教の要点は如左

我の罪にあらず 罪の我なり 大千世界の罪集注して我となる

如来の慈悲にあらず 慈悲の如来なり 大千世界の慈悲を集注して如来となる

我ある時三千世界罪なり、我なき時三千世界慈悲なり

罪障功德の体となる、罪障を離れて功德なし、罪は如来の慈悲なり。

我ありて如来の慈悲をぬすむ時罪惡Ⅱ苦惱となる。苦惱は畢竟如来の慈悲の我に対する反射なり。歡喜光は我に反射する時、「我が不歡喜」となりて顕はる。智慧光は我に反射する時「我が愚痴」となりて顕はる。十二光皆然り。故に一切の苦惱は、如来の慈悲が我に対する反射にして我は慈悲を顛倒して苦惱として以て自己の有とす。我滅たる時苦惱は如来に皈りて慈悲となる。故にわが苦惱は慈悲存在の唯一の証左なり。

故にいふ。わが助からむとするは根本的語謬なり。我は助からず如来回向の信心だけ助かる。信の一念に三世の業障きゆる時久遠劫来の我は死したるなり、消えたるなり。根本は切斷せられたり、信後は穢身が動機となつて我の陰影を生ずれども慈悲を直にそを消したまふ。

味を失ひ候ふ。自己が無我に達するに従ひ所謂人情を読むの眼は従前に幾倍致候へどもこれを寫すの筆はトント鈍り果て候。

中根君飄野西に向ふて去る、上野君起つ、小生の手にかけた中、最も熱心なる加藤某不日入隊（コレハ非常に活動し居れり）小生の召集も近きあるべしを伝へらる（名古屋は砲兵不足せり）、よりて小松君起たしめんとす。

小生ほとんど暇なし、原稿の事あてにしたまうな、されどいづれは書いて送る。安藤君も国にて起つべし。

松井君煩悶居る様子兄等導きたまへ

無我苑諸兄

文昭

〔封筒表〕

東京府巢鴨村大字上新田

無我苑同朋御中

〔封筒裏〕

五月卅日午後

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

書簡一〇（明治三八年六月二三日）

●「我」の宗派、宗派の「我」

山田文昭

▲我は是れ真宗大谷派の僧侶なり。

▲草廬、新緑陰濃やかなる處、机上『無我の愛』第一號を披き、讀みて評論欄の『宗派の「我」の破綻』に至る、胸裏忽ち声ありいふ、我は是れ真宗大谷派の僧侶なりと、幾度か憶記して清風胸に溢る。

▲我、嘗て宗派の腐敗を観るや、意竊かに革命の火を呼びたりき。革命の火の漸々消えむとするや意竊かに身を宗派以外に脱せむと希ひたりき、而して遂に、我は宗派の私弟に非ずして如來の公民なりと信じたりき。

▲『我』は、それ自身に不可思議の破綻力を内在し、自ら分離して理想我、現実我となるや、此両者が相引かんとする事によりて相分離し、遂に両者を泯滅するに至る。予が幼時の理想我は「我の宗派」となりて現はれ、現實我は「宗派の我」となりて現はれしが、半途にして一轉し、「宗派の我」の上に理想我を見出すに居たりぬ。分離の終極、「我は宗派の私弟に非ずして如來の公民なり」といふに至り、更に一轉して、「我の宗派」は「宗派の我」と共に泯滅せり。

▲觀念界の宗派は泯滅して、實在界の宗派は現前せり、「我の宗派」にも非ず、「宗派の我」にも非ず、宗派我なり。我は即ち無我なり。宗派

亦無我ならざるを得んや。

▲我は嘗てしか思ひたりき。我か真宗大谷派は腐敗せり、我か真宗大谷派の前途は危殆なりと、然り、然れども真宗大谷派の前途は悠久なるを如何せむ。何となれば実在界の大谷派は実在なればなり。

▲世の諸君、論者が攻撃する大谷派は『論者の大谷派』にして真の大谷派に非ず。論者、先づ自から大谷派の生命たる他力信心を躰得して無我の信者となり、而してその大谷派を見よ。巍然たる殿堂は是れ七寶樓閣の浄土の影現にして、大法主臺下は是れ如来の化身に非ずや、壇上に於ける宗祖の聖像は永へに不死の尊靈を宿し、法會に於ける嚴然たる儀式は、直に是れ浄土の莊嚴を想はしむるに非ずや。その生命を知らずしてその形骸を揣摩し、徒に扈々たる妄論を弄ぶ、愚も亦甚しといふべきのみ。

▲我も亦此愚者の一人なりき、されどその愚や我に於て愚なるのみ、論者も亦論者自らに於てのみ愚なりといふ得べし、明日にいはゞ、我は他より愚なりといはるべき理由なきと共に、我れ論者を目して愚なりといふ理由なきなり。

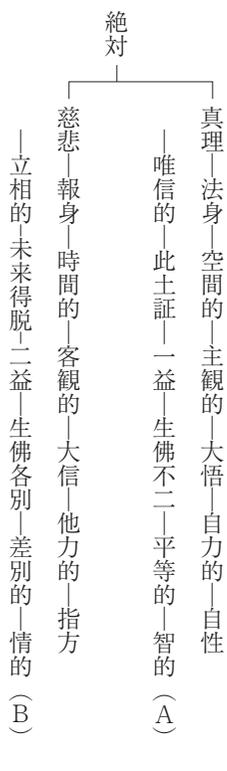
▲我は茲に如来によりて如来に懺悔せざるを得ず、我が既往の半生は、容姿は大谷派の僧侶にして、心は大谷派に對する外道なりき、我今茲に懺悔して、心霊始めて真正の大谷派の末弟に連る。我は是れ、三界の大導師たる大法主臺下の直弟にして、然も宗祖、中宗の直弟なり、容姿は我の知る處に非ず、我が悠久の心霊、悉くこの大谷派の生命たる他力回

向の信心を躰現する事を得たるなり。

▲宗派「我」は破綻すべし、大谷派「我」の破綻は即他力無我を生命とする、大谷派の自在を自證するに非ずや。(稿後、精神界着、多田兄の追懷録中の第二の得度の一説を讀みて感愈深し)

伊藤兄机下

小生は日々信心増長に今日に於ては全く宗祖の信念を一致致し候。兄の所謂舊式といふ點に版着致し候。言語思想発動する事によりて兄と全然正反対に出でざるべからず。小生をして「無我愛」に寄稿せば紙面の文字を一々打消して否定せざるべからず。於是「無我愛」の真理が顕はるべく候ふ。されどこれは徒らに読者をして誤らしむるのみ目今『自力念佛と自性唯心の邪執』と題する一文を草せんと存じ候らひしが、それは全く「無我愛」の全紙を否定するの観有之候間半途にしてやめ候ふ。大靈(絶對)一度相對界の兄と生との上に降り漸次生等を導くに全く正反対の方向に導ひく、兄は智の人、生は情の人、於是乎下の如く不一の思議なる方向に進めり。



兄は(A)の形式 小生は(B)の形式(A)の形式は全然禪宗なり
(B)の形式は全然真宗なり 禪宗は(A)を本位として(B)を含み、
真宗は(B)を本位として(A)を含む、

両者相遮せずと雖も「肉と靈」とよりなる人生の間に於ては就れか一を
本位をせざるべからず、そは直覺に任さ、る得ず、小生は修養の結果慚
次情的に傾むき今では真宗の信仰そのまゝに候ふ、小生は思ふ、情より
入るもの、絶対安心は禪宗に非ずして真宗なり、智性のもものは真宗に非
ずして禪宗なり、無我苑の同朋更に修養の一步をす、たまはゞその間の
旗色鮮明たるものあらむ小生は近頃益奇異の感にうたれし

伊藤兄が真宗の外道となりて現はれしと共に小生は真宗の正道となりて
現はる。伊藤兄が現在中心世界の正道をして現はると共に小生はその外
道となりて現はる

兄は生の解決を主とし小生は死の解決を主とす、小生の布教は種々の論
理を以て死の関門を通過せしむるに在り、理想我と現実我との絶対合着
は直に絶対分離を意味す、死の関門を通過せざれば人生の真面目に皈る
能はず。

兄と小生とは今後、修養を重ねるに従ふて益その旗色鮮明にならむ、全
く正反對に進む程、小生等の信仰が真理なる事を示すに非ずや、快甚し。
兄は折伏的に真宗以外に立ち 生は攪受的に真宗の内に立つ、小生は信
仰の鼓吹のみを以て真宗を復活せしむるに在り。この事「無我の愛」に
のせても可なるか。

伊藤兄の返事をまつ。

小松君は自家を出奔せり、上野君は時々來訪、前君は知的、後君は情
的、両君共、未だ無我「我」を脱する能はず、故に前者は禪宗的に
「我」の世界を飛び出され候、後君は恐らく小生と同一信仰過程を履ま
る、ならむと存せられ候ふ。

小生は多大なる趣味を以て安心に関する宗乘の研究を始めたなり。

伊藤兄

文昭

〔封筒裏〕

東京府巢鴨村上新田

無我苑ニテ

伊藤証信君

〔封筒裏〕

六月廿二日

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

書簡一一 [明治三八年六月二五日]

伊藤兄机下、

原稿紙は本日到着致候。近来霖雨甚しく出岡致さず。そのため寄付金の送致も遅延致し居候條御海容下度く

小生は近来蟄居非常に怪しむべき程信念増長致候。道に進むてふ信前の語は信後の今日は於て味はれ候。行に於て進むとは同時に信に於て、進み候。それについて小生は再び貴兄の御金鞭を仰かざるべからずと存じ候。

小生が俄然如来の大命を奉じて起ちたりといふ時現在中心に回転しか、りたる時に候。而して目今は全く未来中心の信仰に一転し終りたるものと存せられ候。これについて小生は、小生に對する直接の指導者たりし兄に對してその變動の経過の大略及び目今の信念を一轉し終りたるものと存せられ候。これこれについて小生は小生に對する直接の指導者たりし、兄に對してその變動の経過の大略及び目今の信念を一應表白してその批評を仰ぎ度く実は一度貴兄に面会せんものと存じ候へども今は其節を得ず不完全ながら書面を以て致し候

○ 「無我」「大悲」

「無我」とは主観客観の觀念の泯亡を意味す。「大悲」も亦然り。而して吾人の「無我」は必ず主観を豫想し、「大悲」は必ず客観を豫想す。吾人は客観の「無我」を認めつ、然も主観に「無我」たる能はざると共

に、客観の大悲を感じつ、主観に大悲を行すること能はざるなり。

我は無我なりといふ觀念は所謂無我「我」を作る、無我「我」は客観に必ず有我「我」を豫想す、これ大悲の起る所以なり。されど無我「我」と有我「我」とともに「我」たるに於て同じく内的破綻を有す。主観真に無我なれば客観亦無我ならざるべからず、客観に我を認むるは即ち主観に我の存する所以なり。この大悲や無我の大悲に非ずして我が大悲なり。真の無我は絶対なり。

大悲を行するの自己は絶対善の自覺あり、大悲の感受するの自己は絶対惡の豫想なかるべからず、絶対善の感なくして大悲を与ふる能はざると同時に、絶対惡の感なくして大悲を感じる能はざるなり。故に大悲を感じつ、大悲を行するは絶対不可能なり、故に真の「無我」は智識（主観客観の区別）の泯亡を豫想し、真の大悲は感情（快不快の区別）を泯滅せざれば到達する能はず。是れ絶対的不可能なるを如何せむ。

○ 現在中心主義

過未無躰と悟りて始めて現在満足を得、過未無躰にして現在のみ獨り實在せば悟れるものは過去の追懐と未来の豫想とが全然無くして可なり過去と未来との觀念なくば何ぞ現在の觀念あらむ。道に進むといへば既に三世を豫想するを如何せむ。進むといふその中心は決して現在に存せざるなり。

「我」現在に満足せば伝導は全く不必要なり、何となれば我には主観、客観ともに存す、現在の我絶対満足ならば現在の社会宇宙もこのまゝ、満

足せざるべからず。

現在中心主義には、悟なく迷いなし。これ吾人が絶対的に考ふる能はざるものなり。

○ 「我」

無我といひ大悲といひ、何物も「我」を豫想せずして何をかなすべき。何となれば人生は主観的「我」の連続にして宇宙は客観的私の連続なればなり。無我といへば人生なく宇宙なし。如何にするも吾人は無我「我」を脱する能はざると共に大悲「我」を脱する能はざらざるなり。

○ 我、我を救ふ能はず、人生は人生を救ふ能はざらざるなり。世

界亦世界を救ふ能はざらざるなり。

時の觀念、空の觀念全く泯滅すれば即ち止む。悟迷、生死の相對觀念は如何にしても吾人の腦より脱する能はず。我といふ觀念あり、この矛盾のある間は相對觀念あり。すべてに救ふといふ、我を我を轉せず、我以外の絶対の大力をたのまざるべからず、我絶対大に對して無限小なり、罪惡無知觀これより起る。人生を救うには人生以外の力をからざるべからず、これ死後を豫想する所以なり、世界を救ふには世界以外の力を想はざるべからず、これ浄土を豫想する所以なり。

○ 未来中心主義

我は絶対罪惡無知なり。此人生は苦痛なり、此世界は穢土なり。

如来は絶対慈悲智慧なり。死後は快樂也、死後の世界は浄土なり。

以上の二者を連結するもの即南無阿彌陀佛の名号なり。この名号中に入

る時未来中心にして而も現在満足なり、而して昨非今是の連鎖によりてす、む、生死はその大なるものなり。昨非は今是によりて消ゆ。

○ 生、死、

生に於て生の解決は姑息なり、必ず死によりて解決せざるべからず、死によりて解決せられたる生こそ、始めて生の真面目をあらはず。未来中心説は絶対真理ならざるべからず。

○ 時間、空間、

時、空の觀念の泯滅（無我）せざる限りに於て吾人は「光」を自己以外、世界以外、人生以外に求めざるべからず、自己も世界も人生も、この光により若くは導びく事によりてのみ、救はる、絶対他力の信仰は、光の源泉を死後に求め報身、報土をしんせざるべからず、「正定聚」は矛盾にして矛盾に非ず厭穢忻淨の過程なり。

主智「禪の無我（絶対自力）大悟——野狐禪（我は無我）」

主情「真宗信心（絶対他力）信心——自力信心（自力回向の信心）」

無我の愛の主張は此位置には非ざるか。小生聞く禪に於て無我の一分を得たるものは外界に於て何等の活動なし。自己が解脱すると同時に宇宙が解脱すればなり。

小生は目今宗祖の信仰と毫も矛盾なき発見す、この信仰のおぼろげ（その時は明瞭と思へり）に現はれ来る時決然たちて布教に従事したるな

り、その際猶多少、一益法門の傾むきありたりといへども要するに死の関門を通過せしむるにありたるものに候。近来内観の結果は益進歩して遂に明瞭なる二益となり候ふ、爾來従来の信者に漸次、少しづつ、の修正を加つ、有之候へども皆進み候ふ。近来は非常に愉快に真に情新の日を送りつ、有之候、今後幾變轉するやも知れず候へども、そは皆道に進む所以に候。如來の大願業力は吾人の信仰として快して退却せしめず、勇んで死の金門にむかふべく候ふ、田舎ものが京都へゆくといふ事をたのしむ中には汽車にのるといふ事加はり居候ふ、正定聚の位はこの汽車に候。風光日に新たなり。希望は直ちに歓喜なり。小生多田兄の修道講話を讀みて、小生の信念が全くそれに一致したるに驚ろく、多田兄は蓋し、浩々洞に於ける最も旧式的人にして旧式の信仰がそのまゝ、生命を得たるが如き觀をなす、

以上は筆にて尽くされ難し、小生は唯だその経過と目今の信仰状態と報して兄等同胞の一顧をわづらはす、幸いに教鞭を惜むならば幸いの至りなり。

〔欄外〕

とかく、これは面會せねばゆかぬと思ひ候、伊藤兄には中々面會の節を得ず。安藤君賑られるならむ。その際、伊藤兄の意見を御脚みも下まじさや、

〔封筒裏〕

東京府巢鴨村上新田

無我苑ニテ

伊藤証信君

〔封筒裏〕

六月廿五日

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

書簡一二〔明治三八年七月五日〕

無我苑同朋諸兄

小生が心霊は第二の大回轉を終れり。僕は無我愛信念の最高潮に達したる時が既にこの回轉をなし始めたる時なりき。殊にその第一義淨として發表したる無我愛第一号が純向下的折伏門を以てしたるは、この回轉に益勢力を加へ急転直下せしめたるなり。兄等は僕に煩悶ありといひたり、然り僕の煩悶は無我愛の信念の矛盾が「死」の動機によりて分裂を始めたるなり、而して今はその前の信念と今の信念との間に、絶対の顯現の形式を異にしたりといふ點に於て明晰なる内観を遂げ得たりと思

ふ、前の信念偽なるに非ず、今の信念真ならざるに非ず、共に真なり。唯前者は後者に進むべき向上の一閃たりしなり。絶対顕現の宇宙人生豈退歩あるべきの理あらむや、小生がパノラマ館中にありし如き無我愛の信念が、絶対罪惡の谷底に目覚め、直に直射し来る如來の慈悲によりて起ちたるは兄等が布教上頗る参考に資す可き事ならずや、僕のみならず、僕の手にかけて幾多の信者が皆この向上の一閃を経て無罪惡觀より絶対罪惡の谷中に覚醒するは、兎に角、無我愛の信念が一回転すべきものなすべきものなる事を証するに非ずや。僕は必ずしも兄等の信念が回転すとはいはず、少なくとも僕及び幾多の信者がこの回転を経験したる事は、兄等の布教上非常の参考なるべしと思ふ、僕は由來智識に乏し、僕が理論的に述ぶる所は推理的に非ずして自己の直觀より來りたるものなり、僕は茲にその一端を報す、兄等若し僕を煩悶中の人なりと見たまは、希くは僕の上に三十棒を喫せしめよ。僕は謹んでそを受けんことを懇禱す。

絶対は言亡慮絶なり。主觀は客觀の區別なく智性情性の區別なし、況や迷悟の區別あらむや。されどその絶対が個人の上に現はるや自覺となる。悟りといひ信といふは則ち是れなり。自覺の語には弊あらむ。されどこの語を用ゆるより外なし、僕をして僕が直觀しつゝ、ありし無我愛の信念について述べしめよ。重々無尽を示すべき語なきに苦めども兄等はこれが判読の榮を賜ふべしと信す。

絶対 (主觀即客觀)



図

絶対に迷悟なし、迷いそのまゝが悟、悟そのまゝが迷、宇宙本来自然法爾の如來なり。主觀なく客觀なく、主觀そのまゝ、客觀なり、客觀そのまゝ、主觀なり。されど廓然大悟といふ。こは絶対が個人の上に現れたるもの、こゝに悟迷の自覺を生ずるに非ずや。既に自覺といふ、主觀と客觀との區別を生せざるべからず、さればこそ悟りの我に対して迷の彼を認むるに非ずや。僕としては言語の便宜上絶対を主觀の上に移して(三界唯一心)いはしめよ。迷悟畢竟主觀にあり、その中悟の自覺のを主觀とし迷の部分を放出してこれを客觀とし、これを悟りの自覺の対象す、悟の自覺(主觀)、迷の自覺(客觀)、はその明晰の進みが比例せり、客觀の迷は主觀の悟を明ならしめ、主觀の悟の明らかなるに従ふて客觀の迷愈現る。客觀の迷は直にこれを主觀の迷を指摘するものにして、主觀の悟りによりて客觀の迷を打破するは、要するに主觀内部に於ける迷悟の衝突に過ぎず。

兄等は知る。主觀客觀の矛盾は要するに主觀内(若しくは客觀内)の矛盾

盾なり。客観は主観に倒影し、主観は客観に倒映す。真に顛倒なり正反対なり。若し迷悟の點よりいへば客観の迷はそのま、主観の悟にして主観の悟りはそのま客観の迷なり。何ぞ迷悟の矛盾あらむや若しこの矛盾にして解かんとする。既に迷あり、況やそを客観の上に置かんとするや。

無我愛の信念の経験によりて吾人が客観の愛を感じずる時は客観界は悉く利他なり、「我執」それ自身が直に吾人に対する無我愛となる。吾人が客観に愛を与ふる時は客観界は悉く我利なり。「愛他」まで悉く我執となる。此両者が益明晰の度を加え来るはこれやがて分裂すべき前兆ならずや。

兄等は悟の後の他愛（布教）を習気といふ、布教そのものを習気をするか。布教によりて習気を減せんとするか、若し布教を習気といはゞ習気を減却するは布教を減縮するの謂なり。布教の減縮は直に他愛の減縮を意味す。習気の終滅は直に信念の終滅を意味す。信念がそのまま習気といはゞ、悟後の修養は信念によりて信念を破壊せざるべからず。若し客観の迷いを破することによりて習気を除くもとせば亦是れ同一の矛盾なり、何となれば客観の迷は主観の習気（布教我）そのままの倒影なり。習気と習気との戦争は直ちに分裂を意味するに非ずや。たとひ一步を譲りて客観の征服のために習気を減するとするも宇宙個々の「我執」は無尽なり而れば吾人の習気また無尽といわざるべからず。然れば正にこれ三僧祇劫の努力を要する。自力聖道の大菩提心にして兄等が社会主義を

して深くしたるものと五十歩百歩なるに非ずや。

而して「無我愛」の信念は平等観なり吾人は平等に愛を感愛せざるべからず。虫魚と人類と区別なきなり、土臺と両親と差別なきなり。吾人も亦平等に彼等を受せざるべからず、両親は身を捨てずして我を受す。小魚は身を捨て、我を受す。愛に区別なし。共に我によりて「無我愛」なり。されど我はその中に著しき差別を感す。而して、小魚が身を捨てて我を受する如く、我も亦身を捨て、小魚を受せざる可からず。僕は如何に修養をつむとも喜んで小魚のために身を擲つの覚悟なし。若しありとせばそれは三僧祇劫後なるべし。これを習気といはゞ僕の習気はあまりに大なるを如何せん。

兄等は僕に煩悶ありといふ。僕が回転をなしたるため兄等のしか思ふ無限あらぬ事なり。今の僕は煩悶を自覚せず。されど布教にたつ前には「死」を觀したる事によりて無意識煩悶と来せり。僕は「死」を觀すべく最も多く最も痛切なる機会を幾度も与えられたり、『我は宇宙の事物の一切何物よりも皆献身的愛を受く、我は何物に対しても献身的愛を捧げざるべからず。汝果たしてその覚悟ありや、然らざれば汝の布教は無意義なり』とは常に胸中にさゝやく所の声なり。而して僕の多く接したる熱烈な求道者は皆軍人にして弾丸雨注の間を走せ若くは走するべきもの、その苦悶はたゞ死にあり。死は人生に於て最も厳格なるものとは亡父が無言の遺訓にして且つ自己が軍隊的生活をなす事に於て重要な問題なり。僕は無意識的に自己の胸中に問ふ「汝戦死を喜ぶや」信仰答へ

僕のは自力の習氣が非常に強くして、それが未来へ出て切れたのであると思ひぬ。布教は慚時歩を進む。道を教ゆるといふより寧ろ教えられる、といふべく、真摯なる求道者青年男女が死に對する苦悶は真に僕に教ゆる所多かりし、故に僕は思へり、たゞ衣食等位の解決では自力の根をたつ能はず、死の関門を通過せしめて「未来明瞭になれば生命を棄つ」といふ決心を促かして、彼等が自力のはからひを斷つことをつとめぬ。されど此際小生尚一益的に傾むき居たりぬ、その後小生の信仰が漸次回轉するについて「無我愛」第一號は小生の豫想以上の折伏的にして小生の回轉を益速やかならしむ。

今に至りて考ふれば小生は自覺が顛倒したるなり。

的下向



一転して

的上向



とあり

兄等よ無我愛の信念が重々無尽なると同時に純他力の信念も亦極めて重々無尽なり。



こんな図位で説明し得る事に非ず。されど自覺が顛倒したるのみにしていづれも絶対なり。されど、小生は第二者に一転して平安の大道は益平安となれり。

プラトンのいふ如く、現実世界は夢幻なり実世界の映像なり。我も然り。客觀の真相は主觀内に顕はる。僕は如来を確信し（如来とは人格以上の靈格なり）久遠の流轉を確信し、未来の浄土を確信す。實在の世界は吾人の觀念界中に在り。罪惡の自覺は自覺せしむる反対の力ニ慈悲なかるべからず。この慈悲が我を導びきて向上せしめ、世界を導びきて向上せしめ、みな浄土に往生せしむ。

これは筆にていふべからず、伊藤兄の明晰なる頭腦によりて、兄等の信仰を正反対に考えたまはば可なり。されど昨年、伊藤兄が僕の所にて語りたる「自力を未来でできる」といふとは非常に異なれり。そんな簡単な事にあらず。

罪惡觀の自覺は真に安慰なり、僕は従来罪惡を自覺せざりしが何ぞはからん。自己の罪惡を客觀に放出して社会の罪惡を慷慨して居たりしなり。反撥するのは必ず同性なり。三願転入の願、空しからず。僕は甘願より十八願に転入せり。僕の自覺に現し来る絶対はこれならざるべからず。絶対に於て二なし、兄等のも絶対なり。僕のも絶対なり。されど兄等のは或ひは破綻を来すべき時期なきか、兄等は僕の前途を祝す僕も兄等の前途を祝せざるを得ず、僕は如来によりて自己の罪惡觀をふかくし、自

己の罪惡觀を深むることによりて如来による此矛盾關係は推ることによりて相引き一步一步向上す。

兄等は布教といふて矛盾による布教を減縮し、真の「無我」に達する時期あらん。立脚地（自覚）を正反対にす。兄等の向下は僕の向上なり、兄等は向下を主とし、僕は向上を主とす。僕は益懺悔といふ事が深くなる殊に従来無意識的に反撥して居たるものほど懺悔の度をたかめゆけり。僕は四面解放（受動的に）せざるを得ず。書面は意を通す事能はず。安藤兄の販宅をまつ。

○布教について種々面白き經驗を得たりしが、そは後に語るとしやう。
○寄付金幸便なきため、おくれたり、明後日第一回を送るつもり○忘れたが、あの商工新聞への廣告は撫琴にはまだ一面識もないから、そのまま躊躇してやめた。○僕も第二義諦として無論兄等の説を主張す。どうも美的趣味を恢復しない伊藤兄が碁の趣味を失なふた様なものらしい。恢復したら、反学をかいて送りたいと思ふ。○先日の原因はいまの無我愛にふさわしからぬと思ふ。○無盡燈の無我愛の批評、當れり。

〔封筒表〕

東京府巢鴨村上新田

無我苑

伊藤証信道兄

山田文昭書簡

〔封筒裏〕

七月五日

三河国碧海郡志賀須香村

大字上佐々木

山田文昭

〔消印〕

明治三八年七月六日

書簡一三〔明治三九年六月三日〕

葱々の別離

麦の穂に笠を見送る別離かな

蝸牛廬の昔を懐ひて

蝸牛の殻を吹くなり秋の風

〔葉書表〕

周防國徳山女学校

伊藤証信様

東京巢鴨八二〇

田崎方

山田文昭

〔消印〕

三十九年六月三日

書簡一四〔明治四十二年一月一日〕

謹賀新正

其後久敷御無音打絶候條御按客下され度毎

々御恩贈の時習にて御消息を承り欣慕に堪えず

候、小生は依例碌に罷在おぼつかなくも向上の一

路をたどり居り候、いま、で幾度か所見の吃正を受

べく筆をとりかけ候へどもついに果たさむ□□□□

十日頃東皈し心算その上にて萬繼□□□□

のため偏に御自愛有之度祈り□□□□

〔葉書表〕

周防國徳山

徳山女學校にて

伊藤證信様

明治四十一年元旦

三河國碧海郡矢作町

大字上佐々木

山田文昭

〔消印〕

四十一年一月一日

※備考…□は欠損箇所。「時習」は徳山女學校で発行した校友誌。

書簡一五〔明治四十一年一月二四日〕

頃は御起居は御寄贈の時習によりて拝見いたし居候。當地は例の嚴寒

御地は如何に御座候哉。療法自愛有之度願上候。小生は依例瓦全乍憚御

休神下され度候。別封、成学報尊圖一葉支那より到来いたし候間坐右に

置し候。御笑納下され度候 敬具

四十一年一月廿四日

〔葉書表〕

周防國徳山女學校

伊藤證信様

明治四十一年元旦

東京市小石川区丸山町十七

田中氏方

山田文昭

〔消印〕

四十一年一月二四日

書簡一六〔明治四十一年一月二十九日〕

拝復

御書面昨廿七日朝大學にて正に落掌事務室より一應拝見致し皈寓後更に幾度か繰返して拝誦致、一種いふべからざる懷舊の感(?)にうたれ候ふ。誠に其後は小生より御無沙汰にのみ打絶甚御歛禮いたし居りさりとて決して忘れたるに非ず、殊に昨春以来當地に出て、より一層貴兄の忍ばれ候へども今日まで御無沙汰致し居り却りて貴兄よりの御熙状に接するとかへす、汗顔の至御座候。御壮栄し段は何より重畳の萬に御座候。小生が其後は別段かはりたることも無く候一昨年貴兄と分袂してより間もなく研究院を卒へ當分は自宅へこもりて門徒布教の傍ら讀書いたす考なりしが、本年二月下旬突然月見氏らより電報来り藤分氏の後任として就職すべき旨慫慂せられ候

尤もそれまでは出る考などなかりしが書に近づきたさに遂に図書館堆裏

山田文昭書簡

の人と相成、三たび居を移して昨秋より目下の處に寓し豫科生一人と共に醫師の本宅の階上に起居罷在り候。午前八時より午後二時迄学校にあり、皈寓すれば古書に親しみ居り候。されば小生は境遇として何等の變化もなくたゞ従来如くに御座候

次に小生が心的状態に就ても其後は別段更りたること無之、古白庵に於ける貴兄の御提擧はいはずもがな、その後屢多田兄の指導を蒙り殊に小生をして引き立たしめしは綱島梁川氏の書に御座候。始めて病間録を讀みしは一昨年末國元において師範校生に道を語りつつある時に候。従来想像いたし居りものとは異り、何となく中心をえぐるる、心地して幾度も拝誦いたし、その後回光録出づるに及びて益同氏の信仰に皈し、反覆熟讀いたし候(今も尚、しつ、あり)その外別段提擧を承たるものは無之候。國元にて師範校生の国躰と道を語つ、ありし時には信仰も何やら進む歩するかの如く感じ居りしは昨春當地へ出でしよりは慚時懣沈の憫に陥り、まことに浅間敷存じ候

冬夏は帰國いたし候が國にある時は順縁逆縁とも著しくて引立てくれ候へども當地にありては誠に平板なる生活のため絶えず懣沈に陥り勝ちに候、當時の同窓は四散して知友乏しく未訪者なきにあらねども多くはこれ研究談に耽るのみに候、趣味に於ても慚時變化し来りて文學の趣味漸く冷やかに此頃は俳句の美醜さへ一寸判断つかぬ様に相成候。小説も一二部讀みしこと有之候へども何だか浅薄の心地して一向に興湧かずたゞ此頃の趣味としては図書館の大整理と古書の研究(覚束なけれども)

の外自然の風景に接する位のこと、御座候

信仰の内容に致りて小生は何等の変化なく候ふ。信することによりて歩み無痛の寶國に進ましめたまふのいふ外別に告白のしやうもなき様に候、小生は死後の往生を期せずして到底人生に満足する能はず候。肉躰はたしかに牢獄なり、この牢獄にとらへられたる小生はまことにあさましき罪惡の生活をいたし居り候へども如来を信することによりて淨邦、影を此土に宿し、時に枯淡なる人生に春風を送り来り候、如何のものにや名利勝他之念は依然として熾盛なり爾れども「免されたる罪囚」として如来の慈悲は時に反省を加へしめたまふ目下の小生は比較的平板の行路を辿りつ、あれども前途は幾多の阻礙あるべしと信して居り候。小生は斯る阻礙と奮闘することによりて洗はれつ、ゆくものなりと信し居り候
自力をすて、他力に皈すといふ真宗の所謂自力とは必しも罪過煩惱そのもの、謂にあらざ、他力に皈したりとて罪惡の身は依然として罪惡なり、罪惡の身から引き上げたまふ大願業力によりか、りよりのむを他力真実の信心と申すやうに聞及び候
貴兄は

曩には真宗以上なるか故に真宗を脱すと称せしが今は真宗の下の下なるか故に真宗に入り得ざることを、相成候

といはるれども真宗はもと極惡最下の機のためなれば、下の下といはるべき謂なきに候はずや「そのま、なりの御助け」といふこと、まことに我等相應のものに候はずや

信仰のことは小生は貴兄より承べき身に候。小生より申上げん程のことは素より御承知の御事なれば申上くべき要も無之、唯、貴兄が「易行易行と称せられたる真宗をも得る能はず」と嘆かれる、は再應御熟考を賜ふの餘裕無之候哉

兔に角、小生は平常兄の復宗を熱望いたし居るものに候

たとひ真宗を得ざるも真宗を渴仰するものは是真宗の徒と称することを得ずとならば小生も亦辛ふして真宗徒の末席を汚すの榮を得るとの自覺を存したまふ以上は一層切実にその復宗を望み候。素より強るは無禮の極みなり、若し兄にして小生の微意を容れたまはゞ、小生は之を先輩に諮りて最も善き方法を取るべく候ふ。何卒御熟考下され度、さすれば先輩諸氏は依然として脱宗以前の貴兄の如く寧ろ幾倍をまして貴兄に臨まるべきこと、信じ候

安藤君は此冬帰国の際訪問いたさむと期し居りしが遂に果さず。門徒のものなどに聞くに病は到底快復の見込みなしとの事に候、大原兄も病勢漸く進み此頃は安静にして淨邦を思ひつ、称名いたし居られ候

巢鴨は月を遂ふて開けゆき候へども風光依然として當時の姿を示し居り候。田崎家へも月に一度位は立寄り候。定五郎氏の二女が昨年生れたる外、家族の上に何等変化無之候

時下折角御自愛も下度いづれ重ねて貴意を得べく候早々

一月二十八日夜

山田文昭

伊藤道兄

〔封筒表〕

周防國徳山局下

徳山女學校

伊藤証信様

〔封筒裏〕

東京市小石川区丸山町於七

田中烈四郎氏方

山田文昭

〔消印〕

明治四一年一月二十九日

書簡一七〔明治四一年三月八日〕

木の芽ふく頃と相成候。大兄依例御健全に御座候や小生事不相替勤務罷在候間乍憚御休神下され度く

先般来の大兄の御書状に就て一度千葉の多田兄を訪ねむかなと思ひ居たるも此頃は學校にて宗史編纂會の事など有之旁多忙にまぎれ、つい御無沙汰に相成候。それに就て大兄定めて御存ならんが住田智見師新年早々来任せられ、殊に小生の寓近く住はれ候に付 小生は常に往訪いたし聲咳に接し居り候。同師の堅固なる信仰は洵に欣に悦の至り御座候 やや

山田文昭書簡

慢心かは知らねど目下の先輩中、小生が大兄の指導者ニ相談相手として

認め得るは今師一人に御座候。過般来屢大兄の心情をうちあけて今師にかたり候處、今師も頻りに大兄に全情を寄せ居られ候。小生より屢全師へ依頼いたし置候間若し大兄より信仰上のごことに關して質問したまへば全師は進んで相談せらるべしと存せられ候。今師の寓所は小生のほとりなれども近き中にかはりたしなど申し居られ候間、書信はすべて大學宛出さるべく候。貴意如何にや

右御伺ひ申上候

取急き候ま、乱筆御免下され度

小石川の寓之

三月八日

文昭拜

伊藤道兄

〔封筒表〕

周防國徳山局下

徳山女學校

伊藤証信様

〔封筒裏〕

東京市小石川区丸山町於七、

田中氏方

山田文昭

〔消印〕

明治四一年三月八日

〔葉書表〕

周防國徳山女学校

伊藤証信兄

二月十一日

東京小石川区丸山町十七

書簡一八〔明治四二年二月二一日〕

田中方

山田文昭

拝呈、先般は御芳志に接し難有在存し

昨夜田崎銀太郎君永眠せられ候、同君本年の初より体の持病にて自宅に

蟄居、一度も外出は致さず候へども一昨日迄は、起居動作毫も平生にか

はらず、昨朝も一時は起床して談話平生の如くしたりしが、午前十一時

頃半醫師の皮下注射を施してより容態稍変動を来し夜に入りては雙親

を両人の阿兄とに對して諒々としてこれまでの恩義を謝し、今は思ひの

こす事なしとて称名致し居り候。然るに家庭のものは、それほど大病

と知らず醫師も亦生命には異常なき旨申し居たりしかば、本人が嚴かに、

且つ温かなる永別の辞も皮下注射の結末、或は囁語には非ずやと疑ひ居

たりしも、その後間もなく、午後十一時頃、安祥に命終致され候。今朝

急報に接し、往訪致し候處、一家の涙のうちに媽然として横はる死体に

對しては、同君の原生より推されて一層哀れの感致し候。不取致有御報

申上候。

二月十一日

〔消印〕